

## はじめに

今年で選択授業として東北を訪れるのは5年目になる。個人的に様々な節目の年になると思っている。

社会的にも様々なことが起こっていて、変化の渦中にある。改めてここまでの足跡を振り返って、先に進んでいきたい。今年を選択授業「東北と復興」のテーマは、表現する方法、構えとしての「アート」。カタストロフィのような再現しえない出来事や物語について「アート」を通じて何かを知覚することだけではなく、自らが何かを表現する「アート」を考えてほしいと思っている。そのための前段として、まずは他者とのかかわりかたとしての「アート」を考えたい。

一人一人が違う他者との距離のある「あいだ」と、重なりのある「あわい」が学びにおいてキーワードになってくると考えている。その視点から当事者と非当事者の関係性も考えられる。「あいだ」と「あわい」から生まれる学びは、子どもたち一人一人が大人になってそれぞれ市民として社会の中で生きていく中で、他者を援助することにつながっていくと思う。それは援助する、援助されるという能動受動だけではなく、他者との関係性（「あいだ」と「あわい」）の中から生まれる中動的なものではないだろうか、と思っている。そこで今回は、東日本大震災という未曾有のカタストロフィについて知ること。特に宮城県石巻市や福島県浜通りへと高校生がスタディツアーで実際に訪れる中で、実際に被災地を見ること、当事者の方から話を聴くことについて改めて考えていきたい。

なお生徒の感想の言葉はすべて原文ママである。

## 「見る」ことと「聴く」こと

スタディツアーは本来その場所にはいない〈わたし〉達が、旅人としてそのモノ(対象世界)と出会う。このモノというのは、日時や場所、人などによって構築されている世界である。全身の感覚に到来するモノであり、それらを〈わたし〉たちは「経験」する。能動的な試みることと受動的な被ることの継起的な連続となる。<sup>1</sup>事前に学んだ知識やそれらの知識をもとにモノを「見よう」とする、「聴こう」とする姿勢が能動的な試みる「経験」と、一方でその結果、対象世界からの応答としての景色や言葉を受動的に「経験」することになる。旅人である〈わたし〉たちに操作可能なものではなく、「到来する」モノとの出会いであり、〈わたし〉はそれぞれに、それを引き受けるように迫られる。

「到来する」ものを知覚するために、このスタディツアーでは五感で感じること(これも「経験」に含まれる)を大事にしている(毎年恒例となってきた生徒の間で伝わる「南浜ダッシュ」<sup>2</sup>もその意味では大事な「経験」と捉えている)。しかしここでは特に「見ること」と「聴くこと」に着目したい。さらにここでいう「見る」とは実際に存在している景色や風景、人を「見る」とこと、かつて存在したもの、未だ存在しないものを「見よう」とすること。音(声=聲)として存在しているものを「聴く」とこと、音(声=聲)として存在していないものを「聴く」とこと。この2つの意味を含意したものとして考えていく。

精神分析医でもあるエーリヒ・フロムは目に見える部分を絶対視する「偶像崇拜」は、物質的なモノの所有に固執し、自らを〈所有〉Havingする存在様態につながると考え、所有にとらわれない存在様態を本来の〈存在〉Beingと区別している。<sup>3</sup>あらゆる物を自分の外にあるものとして「見る」ことは、巡りめぐって自分自身

<sup>1</sup> 新茂之「デューイ『民主主義と教育』における経験という概念」日本デューイ学会編『民主主義と教育の再創造』勁草書房,2020年,p137-p146

<sup>2</sup> 「東北と復興」を開設した2022年度の石巻スタディツアーから続く文化。石巻市の震災遺構門脇小学校、南浜地区のフィールドワークの際のちょっとした隙間時間に南浜復興記念公園から海岸までの数キロを数名の男子生徒が走り、砂浜で海を見て帰ってくるという生徒の間で始まった文化。

<sup>3</sup> エーリヒ・フロム『生きるということ』紀伊国屋書店,2020年

を「物」化してしまうことや、「it seems (～と見える)」という言い方を例に、自分の問題を突き放して、他人事のように言う表現にもつながっていると指摘している。<sup>4</sup>このことから堀江宗正によれば、フロムが「見る」ことを、操作の対象として見ること、「主体的に見る/主体を通して見る」ことの二種類があると考えており、とりわけ後者の「主体的に見る/主体を通して見る」ことを肯定している。<sup>5</sup>それは目に見える可視化されたものではなくその奥にある可視化されない内面的な「その人の本質を丸ごと、あるがままに見る」<sup>6</sup>ことであり、これは表面的には見えないものを知覚する、「聴くこと」に近いものである。

2022年度の生徒に、実際に石巻市スタディツアーを行う前までの授業の中で印象に残ったものを書いてもらった。その中で「見る」にかかわって次のような言葉があった。(すべて原文ママ)

- ・授業中に見た津波の映像が印象的でした。海がない県にずっといるからけっこうしょうげき的でした。あんなに水が進んでくんだな～と思った。
- ・一番最初の方に見た、震災の津波のビデオが印象に残っている。高校生になって見た津波は、幼稚園児だったあの時みた津波と全く違って見えた。もし自分があそこに住んでいたら、と考えた。思い出、コミュニティ、家、家族、もし生き残っても、死んだ方が楽なのではと思ってしまうと思う。それでものりこえて、今、生きている人は本当に凄と思う。頭が上がらないなど、ビデオを見ながら思った事を覚えている。
- ・授業って感じではないけど、ビデオを見た時かな。ヘリからの映像って中々見れるものではないし、ヘリに乗っている人の生の声が聞けた。「うわあー」とか言われちゃったら、心に残る。
- ・3.11の地震と津波の映像を見た時、私はテレビやニュースから流れる物しか見れてなかったから、映像ごしから伝わってくる臨場感と鮮明さにすごく胸がドキドキして、苦しくなったのが印象的だった。

映像であっても生徒の心に残るものであった一方で、ヘリから見える津波の光景に対してどこか距離があるようにも感じる。ヘリによって俯瞰的に見るからこそ生じる衝撃と、一方で俯瞰的に第三者視点から見るからこそ生じる距離感がそこにはあるのではないだろうか。実際に石巻市スタディツアーに参加した後の生徒の感想から「見る」ことについて抜粋したものを以下に載せるとその差がさらに出ているように感じる。

- ・今まで被災地の現状は画面を通してでしか知らなかった。実際に現地を訪れてみて、正直ここで大きな被害があった、という実感は湧かなかった。道路は綺麗に舗装されていて、建物も新しく綺麗だった。地形は遠くまで見渡せる程平坦で、津波が地形も全て飲み込んだのだと感じた。また、至る所に津波浸水深や津波避難場所の標識があり、津波に対する意識と同時に、今も毎日のように市民の心に残り続けているのだと感じた。見たくない、思い出したくない人も少なくはないと思う。しかし、震災を連想させるものが道通りに多くある事から忘れてはいけないという強い気持ちが込められているように受け取った。
- ・初めて訪れた場所だったけど事前学習の背景が、その場所を違った景色にしてくれたように思う。だけれど、ただだからこそ、思っていた以上に綺麗で整備されていると素直に感じた。感想交流の時に、応答として綺麗な町として出されているのは嫌だね、と“新しい町”と切り開いていることに疑問が残っていること、だからこそ語り継がれているのかもしれないと話してくれた。この時、町そのものから訴えられているものがあるのかもしれないと感じた。…(中略)…実際に足を運んで見たものは、映像で見る時とは違う迫力があつたし肌で感じれるものがあった。風が通りひとつひとつ目に映った光景から、子ども達が笑いかけ走る姿がどことなく私の目には映つたし、想像でしかない光景と今日の前にしている光景が行ったり来たりまた重なったりして

<sup>4</sup> エーリヒ・フロム著 堀江宗正・松宮克昌『聴くということ 精神分析に関する最後のセミナー講義録』

<sup>5</sup> エーリヒ・フロム著 堀江宗正・松宮克昌『』

<sup>6</sup> 同上,p130

いた。大川小学校では手元に映る写真と話してくれているその温度がよりそれを鮮明にしてくれていると感じている。ただ同時に、私にはこれを飲み込みきれないと思うし想像し切ることにはできないのだと痛感した。それでも、足を運んだことや展示物を目にしたことで当時の一瞬一瞬を切り取るように様々なことが目に映った。  
・スタディツアーの1日目には飯能市から石巻市に向かった。道中の途中、仙台市から石巻市に向かう電車の中で、違和感を覚えた。その違和感は電車の窓から見る景色にあった。まるで町の雰囲気も模擬的に造った町。私が見てきた町、住んできた町は、どこか空間の使い方にゆとりがあり、独自性をもっていた。でも私が電車の外に見た町は、スペースに無理やり家を詰め込んだようで、独自性というよりは規律性に傾いていた。しかも隣の町は、昔ながらの雰囲気があり、それとの対比でより一層違和感があった。この違和感が地震、津波、復興などと直接的な関係があるかは分かれなかった。けれど、のちに行った「みやぎ東日本大震災津波伝承館」で、非可住エリアにより移住を余儀なくされた住民の話や話を聞くと違和感の正体を少し掴めた気がした。

・今まで目に見える数字だけみて分かった気でいたけれど、その数字の中にある被害にあった方々のことを想像し、お話しして下さった方の地震や、津波のお話から災害がどんなものなのか想像した。

相手が思ったことをそのまま受け取れるわけではないけれど、災害のことを完全に理解できないことにもどかしさを覚える時もあった。

「主体的に見る/主体を通して見る」という「経験」を支えているのは、資料や実際に出会う人たちの語りとそれによる個々の思考に他ならないだろう。資料館で見る震災前の写真や映像、実際に出会った人たちの声、そしてそのことをもとに震災前に存在したのを見ようとする、そして未だ存在しないのを見ようとするのが可能になる。そしてそれは実際に現地で暮らしている人たちが見ている景色を見ようとする営みでもある。かつての生活の記憶の上にある現在の風景、これから先の「復興」のなかで変わっていくであろう「風景」。そのことを生徒たちも想像して「見ようとする」。その答え合わせをすることも、そもそも同じ「風景」を見ることも、不可能である。死者が訪れる街、死者との出会いがある街としての「風景」<sup>7</sup>を知って想像することはできても、同じように出会ったりすることは決してないように。しかしそれでも「見ようとする」ことが、ツアーとして訪れたことによって「到来する」「経験」に対して〈わたし〉が「応答」していく営みに他ならない。

次に「聴く」ということについてである。堀江によれば「フロムの精神分析は、可視化されない内面的本質を聴き当てようとする。それは「見ていることと違うものの可能性に開かれる」ということ<sup>8</sup>である。先に書いている「主体的に見る/主体を通して見る」ことを支えているものの一つが、出会う人たちの声、語りである。なぜならばその「風景」をどのように見ているのかは、その相手に成り代わることが出来ない、不可能である以上、相手の語りから探っていくしかないからである。見た景色だけではなく、様々な体験、記憶は相手からの言葉、声や語りを「聴く」ことから、スタディツアーとして訪れている〈わたし〉は知覚していくことができる。そしてそうした「語り」を子どもたちは学びや発見、心に残っている「経験」としてあげることが多い。

東日本大震災という出来事、カタストロフィの当事者たちの体験、記憶は、それぞれ表象することに限界がある。そもそも声や語りでも表現しえないものも多い。それでもこうした体験が未来に向けて二度と繰り返されてほしくないと思うからこそ、当事者の方たちは記憶を子どもたちに語ってくださる。アレントは「リアリティは、事実や出来事の総体ではなく、それ以上のものである。リアリティはいかにしても確定できるものではない。「存在するものを語る」(レゲイン・タ・エオンタ)」人が語るのはつねに物語である。そしてこの物語のうちで個々の事実はその偶然性を失い、人間にとって理解可能な何らかの意味を獲得する。イサク・ディーネセンの言葉を借りれば、「あらゆる悲しみも、それを物語にするか、それについての物語を語ることで、耐えられるものとな

<sup>7</sup> 金菱清 (ゼミナール) 編『呼び覚まされる霊性の震災学 3.11 生と死のはざままで』

<sup>8</sup> エーリヒ・フロム著『聴くということ』p338

る。」これは申し分のない真理である。彼女はわれわれの時代の偉大な物語作家の一人であるばかりでなく、自分が何をなしているかを知ってもいた。物語するという行為が何であるかに気づいていた点で、彼女はおよそ独自であった。彼女は、悲しみだけでなく喜びや至福もまた、それらについて語る事ができ、物語として語る事ができて初めて、人間にとって耐えられるもの、意味あるものになると、つけ加えることもできたであろう。真実の真理を語る者が同時に物語作家であるかぎり、真実の真理を語る者は「現実との和解」を生じさせる。<sup>9</sup> 矢野は以上のアーレントの言葉を引きながら、だからこそ「物語」の意味について、「出来事が忘却されずに記憶され継承され思考されることである。そのためには出来事は物語として語られその意味が伝えられなければならない。」と説明する。

その場合に聴く側である子どもたちはどういった姿勢を持つことが良いのだろうか。子どもたちは精神分析医でも、臨床心理士でもない。しかし彼らの視点を参考にする事で、「聴く」ことの新たな可能性に広がると考えられる。その新たな可能性とは、語る当事者の方たちと聴く子どもたちにしかつくりだすことができない「学び」の空間への可能性である。それは「そのとき、その場で、その人に向かって語られる、ということ。その限りにおいて、〈出来事〉の記憶を語る、〈出来事〉について証言するという営為それ自体が、一回限りの、唯一無比の行為」<sup>10</sup>に他ならない。ただし、実際に起こった「出来事」ではなく、こうした「語り」などの表現活動によって生み出されたものが、その「出来事」そのものであると受け止められてしまうことがある。<sup>11</sup>この「語り」によって生み出された「出来事」が、実際に起こった「出来事」そのものであると受け止められる背景には、体験者と非体験者の間で基本的には相互の理解や記憶の受け渡しが可能である、というコミュニケーション観である。<sup>12</sup>しかし、体験者と非体験者の間には体験した/していないということに基づく言葉や感覚の違いがある。そのため体験者である話し手は、「異質言語的」な人間観のもとで、混成的で異質な聞き手を想定して「語りかける（address）」構えが語り手に生み出され、「メッセージが宛名（address）に到達することが保証されていない」<sup>13</sup>ままに、それでも不確かさを前提にしながら語りかけ続ける行為が行われる。東北の被災地を訪れるにあたっては、震災体験の有無に基づく「異質言語」だけではなく、方言と日本語（標準語）という「異質言語」があることもあげられる。日本語（標準語）は近代以降、関東を中央とする中で成立した言語である。この点もまた、関東にある埼玉県と東北地方（とりわけスタディツアーで訪れる宮城県石巻市と福島県浜通り）の関係を歴史的に考えなければならない<sup>14</sup>。「日本」という国家の名のもとに同化された、あるいは同質の存在であることを前提にすることで、実際に語られた内容を違うように「聴く」こと、あるいは「聴く」姿勢によっては語り手に対する「暴力」が起こる可能性がある。例えば福島第一原発事故は、東京電力が運営し、関東の人たちの電気を生産していた原子力発電所の事故であるという点で、福島県で出会う語り手と関東から訪れる聴き手の間のポジショナリティが明確に異なっているが、このことを念頭に置いてコミュニケーションをとるよう心がけなければならない。

こうした語り手と聴き手の出会いは、時として「語る人が聴く人からの共感や理解が得られやすくなるよう、聴く人にとって受け入れられやすい言葉や筋書きをつい選んでしまうことがある」<sup>15</sup>かもしれない。この点についてアイヌについてのナラティブ研究を行っている石原の次の指摘が参考になる。アイヌの人が自らのナラティ

<sup>9</sup> ハンナ・アーレント『過去と未来の間』p357

<sup>10</sup> 岡真理『記憶/物語』岩波書店,p94

<sup>11</sup> 酒井直樹『日本思想という問題——翻訳と主体』

<sup>12</sup> 山名淳「序章 災害と厄災の記憶に教育がふれるとき」『』p7

<sup>13</sup> 酒井,前掲書,p9

<sup>14</sup> 実際に2023年の石巻市スタディツアーの中で高齢の方から昭和8年の地震、津波についてのお話を伺った際に、方言が強く生徒たちが全く聞き取れず、コーディネーターしてくださった地元の方から後刻翻訳された内容がデータとして共有されたことがあった。

<sup>15</sup> 岡部美香「災害の集合的記憶とは何か」山名淳『災害と厄災の記憶を伝える』p161

ブを語れない理由として、「聞きたい人に合わせてストーリーをつくっていつている」「人の顔色を読むのにたけている。何が聞きたいのかに合わせて話をしてしまう」ために、和人が期待するイメージをアイヌ自身も語ってしまう。和人の中でも、ヘイトスピーチを行う右翼の側の和人からの攻撃だけではなく、アイヌを支援しようと運動している和人の側（＝左翼）にも合わせて話をするとということがあるために、自らのナラティブを語れていない状況があるという。<sup>16</sup>ここには聴き手の側の姿勢の問題が提起される。しかし一方で語り手、聴き手の関係性について民話の語り継ぎの場という視点から、民話採訪者である小野和子は次のように言っている。語り手は民話採訪者である「わたしたちを前にするとき、語り手の話はある程度客観化されて、苦労話においては私情に満ちた暗影から、語り手自身が自分を解放していることにま気づかされる。そういうときの語り手の表情に、なんとも言えない浄化されたうつくしさを感ずることがある。そこには、突然の乱入者であるにもかかわらず、「聴く耳」を信じようとする意志に支えられた驚くほど単刀直入な自己解放があるのだ。こういう意味で、「山を越えて」「街へ出て」語りを聞こうとする意志に支えられた聞き手と、語ろうとする語り手の、対等なぶつかり合いの場だと言ってもよいのかもしれない。」<sup>17</sup>石原と小野の語り手と聴き手の関係に関する違いは、研究のためか民話を語り継ぐためかという目的の違いはあるかもしれない。しかしインタビュー調査において調査者と被調査者の関係がある種の権力関係（「支配-従属の関係」<sup>18</sup>）にあることも指摘されており、小野の「対等なぶつかり合いの場」が語り手と聴き手の関係として目指すべきところかもしれない。

語り手と聴き手の関係によって生じうる限界性を踏まえて埼玉から訪れる高校生たちが、被災当事者の方たちの語りを「聴く」ためにはどういった姿勢が良いのだろうか。声という漢字は本来は「聲」と書き、「耳」で聴かれることが前提になっている。だからこそ当事者たちの語り、声を聴くためには聴き手の姿勢が重要であると私は考えている。岡真理は記憶を「自分のものにする/領有する」ことの批判を行っている。むしろ当事者たちの記憶の語りによって、その出来事の記憶を「分有」することしかできないと指摘している。<sup>19</sup>鷺田清一も「聴くこと」について、他者を迎え入れる「歓待」として捉えつつ、しかしそれは他者を「われわれ」のうちに併合するような、他者をサブプロプリエ（s' approprier＝同化する、専有する、横領する）することではないことを強調している。むしろ自己を差し出し、他者との関係の中に傷つくこともいとわず、自らをヴァルネラブル（valnerable＝可傷性、傷つきやすさ）な位置に置くことだとしている。<sup>20</sup>ここには自己に先立つ他者との原初的な依存関係もあるだろう。<sup>21</sup>だからこそ、信田さよ子が上間陽子との対談の中で語っているように「私が中立的になろうとして聞いたとき、目の前に座っているひとの口調が明らかに変わった」<sup>22</sup>ということが生じうる。すなわち「聴く」ことは、自己を中立的な位置ではなくて、相手の側に置くことである。その理由を信田は同じ対談の中で「中立は必ず「力のある側」「強い側」に与してしまうのではないか」<sup>23</sup>と述べている。これはハーマンの「加害者の側に立つことは楽であり、そうになってしまいがちである。加害者は、第三者に何も手出しをしないでくれというだけである。加害者は、悪事を見たくない、耳をふさぎたい、そして口をつぐんでいたいという万人の持つ意向に訴える。被害者のほうは、これに対して、第三者に苦痛の重荷をいっしょに背負ってほしいという。被害者は行動を要求する。かかわることを、思い出すことを要求する。」<sup>24</sup>という言葉とも重なる。中立的に聴こうとするこ

<sup>16</sup> 石原真衣 村上靖彦『アイヌがまなざす 痛みの声を聴くとき』岩波書店,2024年,p227-228

<sup>17</sup> 小野和子『あいたくてききたくて旅にでる』,PUMPUKAKES,2022年,p57

<sup>18</sup> 土屋葉「ラポール」p83,桜井厚・小林多寿子編著『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房,2018年

<sup>19</sup> 岡真理,前掲書,p96-98

<sup>20</sup> 鷺田清一『「聴く」ことの力 臨床哲学試論』筑摩書房,2021年,p133-134

<sup>21</sup> 岡野八代『戦争に抗する ケアの倫理と平和の構想』岩波書店,2015年,P26

<sup>22</sup> 信田さよ子・上間陽子『言葉を失ったあとで』筑摩書房,2022年,p18

<sup>23</sup> 同上

<sup>24</sup> ジュディス・L・ハーマン『心的外傷と回復』

とは、加害者の側に時として与することになってしまい、語り手を傷つけてしまうかもしれない。中立的な立ち位置に立つことができるのは、自らがその語り手の語りを「自分のものにする/領有」することができるか判断できると考えているからだ。その意味で「力のある側」「強い側」(=加害者)に与しやすい。

「聴く」という行為は被害者からの「苦痛の重荷を背負ってほしい」という要求への応答でなければならない。しかしそれは「苦痛の重荷」を我が物にすることではない。「自分事にする/なった」ことをゴールとして設定すると、語り手の「苦痛の重荷」を「自分事」として専有、領有してしまう暴力につながってしまう。とりわけ熱心な聴き手においても、「当事者の語り手から経験的語りを聞くことによって自ら語り継ごうとする人のなかには、過酷な歴史的体験を生きのび、ひどい差別や被害を受けても生き残ってきた経験を前に立ちすくみ、サバイバーや犠牲者である体験者を無条件に崇拜し、ヒーロー視したり聖視してしまう傾向があることである。そうになると、語り継がれる経験はモデル化され、固定化し、さまざまな経験が一元化されて管理されることになりかねない」<sup>25</sup>。ここでの「一元化されて管理される」ということが「自分事」にして出来事の記憶を専有・領有する営為に他ならない。そしてそれが語り手への暴力としてだけではなく、多様な語りや知、アイデンティティに対する不寛容としての「記憶のポリテイクス」への加担をする危うさも孕んでいる。<sup>26</sup>だからこそ語り手と聴き手が一緒に「苦痛の重荷」を持つような「分有」の形が求められる。そこには語り得ない(unspeakable)ような記憶も、「unspeakable」としてそのまま聴くことが求められるだろう。聴き手が、「自分事」として我が物にして、その記憶を理解できるような形に書き換え、ストーリー化することではない。だからこそ、音=声として存在していないものも聴き取ろうとする姿勢が求められる。

スタディツアーを通して語り手から聴き手として「聴く」ことについて、生徒たちは次のように書いている。

・本当に語る人によって温度感が様々だった。というより全然違っていた。場所によって、人によって、経験した震災が違うということを実感された。震災後の生活の選択もそれぞれにあったと思う。震災後を生きていく人たちにとって助かったことがただ喜ばしいことではないと知った。「家族が死ななかつたんです」と苦しそうに言った方がいた。悲しみを分かりきれない悲しみが、あの場にはもっともっと強く、存在しているのだということ。それでも私は、その隔たりを越えて、ひとりひとりの悲しみは大きさではかれるものではないと言えるようになればいいと思う。

・1年間の授業を通し、これまで施設名などで度々見てきたものの、伝えることについて深く考えて来なかった「伝承」という言葉。学んでいき、考える中で、「東北」にも「復興」にも密接に関わっていて、今後の復興にも最も大切な物だということを知り、この言葉の重みを感じる事が出来ました。

3.11で数多くの人や物が失われ、文化、風習が、伝統が絶える危機にあり、復興においても伝える事が足りずトラブルが発生したりしている中、将来同じ轍を踏むことがないように、これまで以上に伝承の必要性を見直す必要があるのではないだろうか」と強く感じます。近年ではインターネットなどが発達して昔よりもはるかに「出来事を伝える」ことが簡単になりましたが、震災による過酷な経験を経た地域住民が、その記憶を後世に伝えることが難しい人も数多く存在するのも事実です。伝えられない人と伝える必要性という対極な存在をどちらも無下にせず、その記憶をどのようにして守り、伝えていくか。そして、経験者では無い、経験者にはなれない我々は、どのように東日本大震災の伝承に関わっていくかを考えるのが、今を生きる日本人にとっての課題なのではないかと1年間の授業を通して考えました。

・私は復興に対してももちろん人の希望になることだと思うが同時に残酷な側面も存在していると感じるように

<sup>25</sup> 桜井厚「語り継ぐとは」桜井厚・山田富秋・藤井泰編『過去を忘れない 語り継ぐ経験の社会学』せりか書房,2008年,p16

<sup>26</sup> 山名淳「災害と厄災の記憶に教育がふれるとき」『災害と厄災の記憶を伝える 教育学には何ができるのか』p10

なった。福島は誰かの犠牲の上で復興が成り立っていると強く感じ、表面上では行政にとっての復興を意味する事業が進められていてそういった事業は無関係な人からしても明らかな復興であるが、上書きされてしまった人達が自分たちの存在を認知させることはとても難しい事を理解した。これは加害構造が明確化されているが被災者の間でも復興観の対立は避けられない。可視化されなかった思いを抱えている人が私の認知が届かない範囲にも大勢いると考えると「語り」が記録以上の意味を持つ事が分かる。復興とは「過去の出来事の克服」という目的だけでなく、「どのように記憶を継承し、未来へとつなげるのか」という問いでもあるのではないか。震災を経験した人々の思いが時間とともに風化しないようにすることも、復興の一環と言えるのだろうし、自分における復興の解にはまだ自信がないが語りの重要性というこの講座で得られた学びを生かしたい。

・一日目は雄勝で暮らす漁師の方や地域住民の方からお話を聞いた。雄勝の漁師の数は震災によってかなり減り、町の人口も四分の一に減ったというのはかなり衝撃的だった。また防波堤の建設によって捕れなくなった魚がいるというのは外部の間はほとんど知らない情報であり、社会の一員としてこういった情報も知る努力をしなくてはいけないと感じた。また自分は「原発の処理水放出についてどう思いますか？」と漁師の方に質問したが、「どうなるかは分からない。ただ自分たちが何か言うと騒ぎが大きくなるのであまり騒がないようにしている」という返答をしていただいた。思っていたよりも冷静に捉えているのだなと思った反面、半ば諦めのようなものも感じた。

・甲状腺がん裁判の原告の方の意見陳述を読んだ時、本当に言葉にならない苦しさを感じました。このような経験をしなければならない人がいる現実がものすごく悲しいし、このような実情に無知だったことを反省しました。北村弁護士のように直接的に人助けをすることはまだ難しいかも知れないけど、「知る」ということだけでも向かい風の中勇気を出して声を上げ続ける原告の方に寄り添うことができる、意味のあり価値のあることだと感じました。この「知る」ことが大切であるということは、一年間「東北と復興」の授業に参加して生まれた私の思いです。

・四日間、たくさんのお話を聞いた中で一番印象に残っていることは、大川小学校でお話をしてくださった佐藤さんの仰っていた「特別じゃなかった頃の、悲劇じゃなかった頃の大川小学校を伝えたい。」「ここにはかつて日常があったこと、ここで元気に走り回っていた子どもたちが、教室で歌を歌っていた子どもたちがいたことを忘れないでほしい。」という言葉です。この言葉こそ、私一人では絶対にたどり着けなかったと思います。私にとっては結構な衝撃で、なるほどな…と驚いた後、その言葉に隠れた計り知れない痛みに触れ、息ができなくなる様な思いでした。「想像してみてもほしい。」とも言われたけれど、正直なところ、あの状態の大川小学校を前にして、私には殆ど想像することができませんでした。でも、たとえ想像出来なかったとしても、決して無視してはいけないものだと思います。また、子どもたちのことを想像できなかったのと同じに、震災で辛い経験をしていない私には、当時辛い思いをした方々の痛み、葛藤などを完全に理解することはできないんだな、と改めて感じました。

・最後に、スタディツアー中、沢山の学びを得ると共に沢山の感情を抱き、様々な意見が自分の中に生まれました。それは、しんどいものが多く、苦しい瞬間が何度もありました。

それでも、一日の最後には講座のメンバーと振り返り、言葉にすることで、自分の感情や意見の整理、他者の意見や感情を知ることで、なんとか三泊四日のスタディツアーを終えることが出来たと思います。震災のことについて学ぶことは、一人で出来るけれど、様々な意見に触れたり、様々な感情に触れることや、何人もの人の人生の最後を聞くことは、一人では乗り越えることの出来ないものだと感じました。このスタディツアーを通して、2011年3月11日に起こった出来事、その日まで生きていた人たちがいる事、これからも震災について考えていくきっかけになったと思います。

先述した民話採訪者の小野和子は「採訪」という言葉には、「《聴く》」ということは、全身で語ってくださ

る方のもとへ《訪う》こと」という思い<sup>27</sup>を込めたそうだ。スタディツアーに参加する高校生たちも関東から《訪う》存在であり、全身で感じて聴いている。小野和子にとって「聞く」こととは、田中正造の「学ぶ」ことを指す「自己を新たにすること、すなわち旧情旧我を誠実に自己の内に滅ぼし尽くす事業」から引用して、「聞く」とは古い自分を打ち捨てていくこと、自分自身を変革すること」として、「いまの自分のままじゃ聞けないんですよ。語り手に見合う自分をつくり出さなくちゃいけない」、と言っているそうだ。「聞いたならば、それに対する自分自身のからだの反応に出会わざるを得ない。そこで自分がどのような人間か、どの程度の人間かを突きつけられる。他なるものに出会い、それまでの自分では決して理解のおよばない事柄の前に立ち尽くす…」、その結果としての「自分自身を変革すること」である。<sup>28</sup>生徒たちの言葉からこうした学びへと向かう姿勢が読み取れるのではないだろうか。

・だから、実際に行ったときに受けた衝撃がすごく大きく残っています。こんなに海や川や山が近くて、何もなくて、あたたかくて、綺麗で、ここでたくさんの方が亡くなっていて、当時のことは分からないし、今のこ  
としか見ることはできないけど、それでもたくさんの方が私の中であって、それを言葉にすることはとても  
難しいです。その時に感じたものを忘れたくなくて、残しておきたくてでもできなくて、すごくもどかしく  
て悲しくなります。今も書いているけど本当に書きたいことは何もかけていなくて何もできないな、と思って  
しまいます。でも、諦めたくないから、頑張って、がんばって、いつか自分の言葉を見つけたいです。この1  
年はそんな自分の中での葛藤が大きかったです。復興ってなんだろう、被災者って誰をいうんだろう、自分  
には何ができるんだろう、どうしたら伝えられるんだろう。きっと全部答えなんてないから、これからもずっと  
考えながら生きていきたいなと思いました。そしてまずは聞いた人みんなが言っていたこと「知ること」を続  
けていきたいです。そのためにいろんな人と出会って、繋がって、見て、聞いて、調べて、考えていきたいで  
す。私も繋げていけるように、学び続けていきたいです。

・ある人から「伝えられる側でもあるけれど、これからは伝える側にもいる」という言葉を聞き、その言葉が  
印象に残っている。知るということは伝えていけることでもあるのだと気づいた。上手に伝えていかなければ  
ならないとも思った。そう考えたとき、どのようにして伝えるべきか。私や講座を受講している人は震災や東  
北、授業で扱った内容について興味があって同じコミュニティの中ではある程度同じ方向を向いて話をしてい  
ると思う。でも講座外の人には興味のある人もいれば全く興味のない、関係ないことだと思う人もいるだろう。  
それに、私は授業を通して、自分が何を伝えたいかが分からなくなるときや、考えていることがあってもそれ  
を言葉にするのに苦戦することが多々あると感じた。頭に浮かんだもやもやをどう言葉にするかすごく悩んだ。  
宮城に行った後の意見交換が大切な時間だったと思う。行ってよかった、また行きたいという意見から、行っ  
ても実感が湧かなかった人、すごくもやもやして悩んでいる人、別の立場からの声も聞きたいと感じた人、他  
人事になりがちだと気づいた人、新たに疑問が生まれた人など講座を受講している人それぞれにいろいろな向  
き合い方があって、みんなの想いに共感して、新たな視点を知って改めて考え、私にとっては知ってそれから  
が大事なのだと思った。人と関わることがたくさんできた授業だった。授業内や宮城での交流会でアイスブレ  
イクをしたり、宮城に行った後の意見共有や質問出しなど授業全体やグループ共有を通して考え、話した。後  
期に行われたシンポジウムに参加して、立命館大学院生や大人のみなさんなど授業外からの人の声が聴けた。  
普段授業で交わすことに近いような想いの人もいれば新たな視点や観点もあり、いろいろな声が聴けたことが  
嬉しかった。人と関わっていくことで、自分の考えたことからさらに発展したり、まどまらない気持ちを少し  
ずつ言葉にできるようになった。

・そして、障害者の方の被災について、私はお恥ずかしながら、この講座を取るまで、去年障害者福祉施設の

<sup>27</sup> 小野和子,前掲書

<sup>28</sup> 濱口竜介「聞くことが声をつくる」p350,小野和子,前掲書

方にお邪魔して、夏の体験学習をさせていただいたのにも関わらず、障害者の方の被災については微塵も思いつかなかったです。こんな当然のことが抜けていたなんて、本当にお恥ずかしい…。だからこそ、いろんな人にも知ってもらいたいと思いました。棒人間の絵などで状況を描くとわかってもらいやすい、という話については目から鱗でした。ピクトグラム（だったかな…）についてとかもまとめてみたいと思いました。

少し余談にはなってしまうかも知れませんが、自分の好きなこと、という面でも、新たな発見を得られたように思います。鯨肉が好きだということと、私、骨が好きなのだな、ということです。特に骨については自分にとっても予想外の衝撃で、予想外のところで自分を知れたように思います。今回の旅で、本当にいい体験ができたと思います。どんなことにもいろいろな視点を持つようにちょっとはなれたかと思ひますし、疑問を探して、見つけて、考えたり意見を聞いたりという一連の動作ができるようになった気がしています。だから、他の場所での話し合い等でも、すごくやりやすくなったように感じますし、自分から考えようと思ひようになれたように思ひます。視点を持って、伝えようとしたら、その人の覚悟を知れたり。寮での災害対策の話し合いの場でも、この時培った学びが生きたように感じられた瞬間もありました。ただ、使っていないと衰えるな、と思ったので、これからも自分から学び、自分から疑問を見つけ、解こうとしていきたいと、今回の旅で考えられました。

・一つ、二つと学んで行く中で狭い視野がどんどん広がって行く。考えないと見えてこない繋がりが見えてくる。これはとても大切なことだと思ひた。これから学んで行くことの中にも何か繋がりが無いか意識して学んでいきたいと思ひ。森さん夫妻がおっしゃっていたもう一つの印象的な言葉。「防潮堤は人間中心的な考え方かもしれない」。今までの自分は自分のことや周りのことにしか考えが及んでいなかったことに気づいた。防潮堤をつくる、つくらぬを考へる時、その他に何かを決める時も、これから先の自分自身が自分のことだけではなくそれによって影響を受ける者がいないかまで考へ最善の方法を見つけることができると思ひなど思ひた。そのためにもまずできることは今回のツアーのような学ぶ機会をもち、いろいろな考へやその人が大切にしたいこと、物を知ることだと思ひ。

・まず今回の東北と復興のスタディーツアーで、私が一番印象に残った点は、やはりフレコンバックについての詩だと思ひます。環境学の選択授業で存在は知っていて、今までは、土等の放射能廃棄物が沢山詰め込まれていて、福島第一原発付近に、これまた沢山、置かれているだけのものかと思ひていて。その中の幾ばくかに詰め込まれているものが、ショベルカーの黒い爪で引き裂かれて、切り取られた、誰かの故郷で、思ひ出であるという考へ方は、今まで一度も描けて無くて。言い方はあれかもしれませんが、今回のスタディーツアーで知れて、良かったなと思ひました。知れて無かったら、もしかしたら一生知らずにいるところだったと思ひます。この時の感情と同じような感情を抱いたのが、国の伝承館…?の外にあった写真達のうちの一枚で、小さな姉妹の2人が、防護服を着て、子供部屋のようなところで、お人形等を白いビニール袋に入れている写真だったのですが、もうこの子達が、このお部屋で防護服をとって、震災前のように過ごすことは、もうできないのだろうな。もっと行くと、もうこの部屋に入るのも、この写真の時は最後で、この後お家は取り壊されてしまったかもしれないと思ひと、原発事故がどれだけ、今までの日常と、故郷を壊すか、というのをありありと感じました。

・いろいろなところで私たちの立場や目指しているものって何なんだろうと感じた。まだ知って、感じて、考へることも完全にできて無のに、知ってしまった。聞いてしまった。から語り継がなくちゃいけない。下の人に繋いで無くてはいけない義務が生じてしまった。これから私はどうしたらいいんだろう。何かしなくちゃいけないと思ひ焦りは感じて無けれど、私には何ができるんだろう。行動してそれが間違った、現地の人には迷惑な事にならないとは言ひ切れ無から怖くなる。そんなことを考へさせられるスタディーツアーだった。

・おれたちの伝承館は今回のスタディーツアーで一番悩んだ「花は咲く」の詩がずっと心に残っています。知らなかったことで誰かを傷つける可能性があるんだって、今回この詩ですごく実感して知らないことへの恐

怖がずっと今も残ってます。宮城の学習では比較的柔らかく迎え入れられていたから…この詩のことを考えると苦しくなる。合唱団でなにも知らない頃に歌ってたから。あの時私が誰かを傷つけた可能性はほぼないに等しいけど、それでもあの時知れなかったことが私にとってはすごく苦しく、励ますものだと思ってた歌が誰かを傷つけるものである可能性が苦しい！もっと早くから知りたかったなあ、東日本大震災のこと。でもこのことを知れたからこれからは「知れてよかった、知らないままにならなくてよかった」に徐々に気持ちを切り替えられればいいなと思う。この詩で福島のことを知ってことの重みを感じて私たちが今まで学んできたことのとらえ方がまた180度変わって向き合うことの苦しみを久しぶりに感じました。

こうした伝えられたことに対してどのように「聴く」かによって、子どもたちはそれぞれ学ぶ。「到来する」モノとの出会いである。しかしここでそのモノが「到来する」かどうかは、実は学びに行く側である、〈わたし〉たち（生徒たち）の側が操作可能なものではない。相手と〈わたし〉の関係性の中で生じるものだからこそ、様々な「聴く」ことについての構えを尽くした末に、最後は祈るように、願うようにしなければならない、と最近考えるようになった。

語り手は何を語るかを、語りたいから語る。しかし語りたいと背中を押すのは様々な状況によるのであり、そこに訪れる側にできることは、その場を作る行為、とりわけ「聴く」という構えや行為によって、である。しかしそれでも最後に何かがあるか、その場に到来するかは、語り手にとっても聴き手にとっても操作不可能であり、最終的には「祈る」ように、「こいねがう」ようにその場にいることしか〈わたし〉たちにはできない。しかし結果的に、生徒たちが「奇跡」のような学びを多くしてきたことを私は見てきたし、聞いてきた。それはその場だけではなくて帰ってきてからの学びも含めてである。「聴く」ことの構えの先に最後は、「祈る」ことしかできないという限界性をまずは私たちが自覚することが、その限界性の先へと想像していくための第一歩なのかもしれない。重なり合うあわいの自覚とどうしても限界のあるあいだの自覚が、その先にある何かを「到来する」ために必要なのではないだろうか。

きっとこの学びへの姿勢こそが、対人援助という他者との関係性の中で起こっている行為、あるいは現象を理解していくための第一歩だと思っている。